

英語の発音表記と音声指導の方向性

柴田 知薫子

群馬大学教育学部英語教育講座

(2015年9月30日受理)

The Revised Transcription and Systematic Instruction of English Pronunciation

Chikako SHIBATA

Department of English, Faculty of Education, Gunma University

(Accepted September 30th, 2015)

SUMMARY

What is a realistic aim of learning pronunciation of English as a lingua franca? This paper discusses what should be taught explicitly in class to non-native speakers of English so that they can speak in a way which is minimally intelligible to their listeners. Teachers are encouraged to attempt at a systematic instruction of English segments and prosody, based on the revised transcription of English pronunciation.

1. 「現代の標準的な発音」と英語の音声表記

英語の音声指導は、これまで体系的に行われてきたとは言えない。原因はいくつかあるが、学習指導要領がふさわしい言語材料として認める「現代の標準的な発音」とはどのような発音か、という問題が根本にある。教科書の音声教材が一般米語 (General American, 以下 GA) で録音されているため、これを標準とするのが前提とされているようだが、GAの母音体系には以下のような欠点がある。

- (1) a. 前舌低母音が狭く、前舌中母音が広い
- b. 後舌低母音から円唇性が失われている
- c. 母音の長さが母音の区別に関与しない

開口度を示す第1フォルマントを観察すると、GAの前舌低母音 /æ/ と前舌中母音 /ɛ/ にはほとんど差がなく、実際の音声では前者をやや長めに発音する

ことによって区別が実現されている (牧野 2005 : 42)。一方、GAの非円唇後舌低母音 /ɑ/ は円唇後舌中母音 /o/ が開口度を増しながら円唇性を失った結果で、日本語の「ア」の領域で /æ/ 対 /ʌ/ 対 /ɑ/ という三つ巴の区別が必要となる。さらに、前舌高母音 /i/ 対 /i/ および後舌高母音 /u/ 対 /u/ の区別には、母音の長さではなく舌の緊張度を示す [±tense] という示差的特徴が必要となる。これらの区別は、日本語話者のみならず、英語と同じゲルマン語派に属するドイツ語やオランダ語を母語とする学習者にとっても困難であることが知られている (Collins and Mees 2009 : 209)。GAの母音体系は以下の通りである。

- (2) a. 単母音 /i, ɪ, ε, æ, ɑ, ʌ, u, ʊ, ə/
- b. 複母音 /ei, ai, au, ou, ɔi/

これに対して標準的なイギリス英語では、開口度

がGAほど広くない前舌中母音が /e/ で表記される。ここで特筆されるのは、2014年に出版された *Gimson's Pronunciation of English* 第8版で前舌低母音の表記が /æ/ から /a/ に変更されたことである。編著者の Cruttenden によると、標準的なイギリス英語の前舌低母音は50年前に比べて基本母音の /a/ に近くなっているという。同時に、イギリス英語の標準発音の呼称も Received Pronunciation から General British (以下GB) に変更された。GBの後舌低母音 /ɒ/ は円唇性を保持しているため、[±round] という示差的特徴によって /ɒ/ 対 /ʌ/ の区別が明確になる。他方、イギリス英語では18世紀までに母音に後続する [ɹ] が消失した後、代償延長や二重母音の滑化の結果として長母音が復活したため、GBの母音表記には長音符号 [:] が使用される。GBの母音体系は以下のように各6母音で構成される。

- (3) a. 短母音 /ɪ, e, ə, ɒ, ʌ, ʊ/
 b. 長母音 /i:, ε:, a:, ɔ:, ɜ:, u: /
 c. 二重母音 /eɪ, aɪ, aʊ, əʊ, ɔɪ, ɪə/

従来の音声指導は、GAかGBのいずれかを「標準的な発音」として、可能な限り標準に近づけることを目標としていた。しかしながら、第二言語としての英語使用者が母語話者の1.5倍に達した現在、この目標は現実的ではないと考える音声学者が多い。さらに、外国語としての英語学習者は母語話者の2.5倍とも言われ、英語母語話者と第二言語使用者との境界も、第二言語使用者と外国語学習者との境界も、もはや明確ではない。本稿は、今後の英語の音声指導はどのような目標を設定するのが現実的かを考えることを目的とする。第2節で *Gimson's Pronunciation of English* (以下GPE) の提言を概観した後、第3節で母音体系について、第4節で子音音素について考察し、第5節では音声指導を体系的に行うには何を明示的に教えるのが適切か、という問いに対して一定の方向性を提案する。

2. 英語の非母語話者と音声指導

GPEは1962年に初版が出版されて以来、イギリス英語の標準的な発音として容認発音 (Received Pronunciation: 略称RP) を記述し、発音の指針としての役割を果たしてきた。第8版でRPがGBに置き換えられたのは、社会方言としてのRPに染みついた特定の社会階層のイメージを払拭するためであって、実質的には両者は同一の社会方言である。2008年に出版された第7版には “Teaching and learning the pronunciation of English as an additional language” という最終章が加筆され、英語の非母語話者を対象とした音声指導の指針が示されるようになった。

英語の非母語話者は以下の3つのカテゴリーに分類される。

- (4) a. 英語の母語話者と接触する際に、日常的に英語を第二言語として使用する
 b. 自国内または近隣諸国において、日常的に英語を第二言語として使用する
 c. 限られた場面で英語を国際共通言語として使用する

英語教育の指導者は(4a)のカテゴリーに所属するものと考えられ、可能な限りGAまたはGBに近い発音を目指すことが望まれる。GAとGBを混合した発音は許容されず、GBを目標とするのであれば、同一音節内で母音に後続する [ɹ] を発音したり (rhoticism)、語中の /t/ を有声化して [ɾ] と発音したりすること (flapping) は推奨されない。反対に、GAを目標とするのであれば、rhoticismは社会的な威信を象徴する発音であり、flappingは自然な音声現象とみなされる。これに対して、(4b)のカテゴリーに所属する非母語話者には、標準・非標準にかかわらず様々な種類の発音の混合が許容される。さらに、(4c)のカテゴリーに所属する非母語話者には、第一言語からの影響がある程度まで許容される。

日本語を母語とする英語使用者および学習者の多くは(4c)のカテゴリーに所属するものと考えられ、

英語を日常的に使用するというよりは、限られた場面でリング・フランカとしての英語を使用することが想定される。GPE 第8版(2014: 344)は、このような非母語話者に対して「国際共通言語として英語を使用する場面で最低限の理解が可能であること (minimal intelligibility in the use of English in international *lingua franca* situations)」という目標を設定している。具体的には、以下の通り第一言語からの影響が許容される。

- (5) a. 短母音5個と長母音5個から成る母音体系で、/ʊ/対/ʌ/の区別はしなくてよい
- b. /l/対/r/の区別は必須であるが、/r/は歯茎接近音でなくてもよい
- c. 多音節語のアクセントは必要だが、無強勢母音[ə]は使用しなくてよい

最も普遍的な母音体系は5母音から成り、日本語と同様に母音の長短を区別する言語が多いという事実を考慮した結果が(5a)である。(5b)の/r/については歯茎弾音を持つ言語が多く、現代英語の歯茎接近音/r/は有標であることを考慮している。¹⁾ (5c)では、無強勢音節の縮小母音は強勢アクセントを持たない言語では実現されにくいことから、無強勢音節においても完全母音を許容している。以下では、これらの提言に沿って英語の音声指導を行うことの妥当性を検討する。

3. 母音体系の学習

母音は個々に獲得するのではなく、母音体系という一つのシステムとして学習する必要がある。日本の教育現場で標準とされるGAには母音の長短の区別がなく、(2)に示した通り9個の単母音と5個の複母音から成るシステムが存在する。(2b)の複母音の学習は日本語話者にとって困難ではないが、(2a)の単母音体系は/i/対/ɪ/, /u/対/ʊ/, /æ/対/ɛ/, /ɑ/対/ʌ/の区別が困難である。このうち/i/対/ɪ/および/u/対/ʊ/の対立は、(5a)に示したGPE

の提言によると、/i/対/ɪ/および/u/対/ʊ/という長短の対立に還元してよいことになる。一方、/æ/対/ɛ/の対立は本来/æ/対/e/という開口度の差として学習されるべきである。たとえ英語母語話者の発音であっても、GAのように/æ/と/ɛ/の開口度に差がないのは音韻論的に合理的とは言えない。第1節で述べたように、英語以外の母音体系ではほとんど使用されない/æ/の表記をGPEが/a/に変更したのは理にかなっている。つまり、前舌低母音と前舌中母音はそれぞれ音声表記通りに/a/と/e/として学習されるのが音韻論的に自然であり、これによって綴字との整合性も得られる。

後舌低母音/a/対後舌中母音/ʌ/の対立も本来は開口度の違いとして学習されるべきだが、5母音体系の言語を第一言語とする英語学習者にとって、非円唇後舌中母音/ʌ/は最も学習が困難な有標母音である。この母音は16世紀に短母音/u/から分離したもののだが、イギリスの北部方言では/ʊ/対/ʌ/の区別はされていない。²⁾ GPEは、短母音/u/を少し広めに発音することによって/ʊ/と/ʌ/の両方を包摂することを提案している。他方、後舌低母音/ɒ/(=GA/a/)は、5母音体系の左右対称性を考慮して、後舌中母音/o/として学習することを許容している。

要約すると、GPEが提案する国際英語(International English)の母音体系は以下の通りである。

- (6) a. 短母音 /i, e, a, o, u/
- b. 長母音 /i:, e:, a:, o:, u:/
- c. 二重母音 /ai, au/

(3)に示したGBの6母音体系と比較したとき、(6a)の短母音体系に欠けているのが非円唇後舌中母音/ʌ/、(6b)の長母音体系に欠けているのが中舌中母音/ɜ:/ (=GA /æ/)である。GPEの提言通りに短母音/u/で/ʊ/と/ʌ/の両方を包摂すると、このように/ʌ/に対応する長母音/ɜ:/が必然的に欠けるという問題が生じる。母音に後続する[ɹ]を綴字通りに発音すれば解決するとみなされているようだが、これはrhoticismを推奨しないGBの立場と矛盾する。中舌中母音/ɜ:/は英語に特徴的な母音であり、

特に /a:/ 対 /ɜ:/ の対立が担う機能負担量が重いことから、音声指導においては明示的に教える必要がある。³⁾ (6b) の長母音 /e:/ は GB の二重母音 /eɪ/ に相当し、/o:/ は /əʊ/ (=GA /oo/) に相当するため、(6c) にはこれらの二重母音が欠けている。/ɔ:/ は生起頻度が低いため、/aɪ/ との区別を免除されている。

(6a) の母音体系に欠けている /ʌ/ は、音声的には /ʊ/ よりも /a/ に近い母音であり、GB では /ɒ/ と交替することもある。この母音を含む語が日本語に借入されると「ア」に変換されることを考慮すれば、/u/ との区別は維持する方が自然であると考えられる。その上で /ɑ/ 対 /ʌ/ の対立が担う機能負担量が軽くないことを考慮すると、/ʌ/ を中舌中母音と位置づけ、対応する長母音 /ɜ:/ を (6b) の長母音体系に加えるのが合理的であると考えられる。GPE の提言通り無強勢音節で [ə] を使う必要がなければ、中舌中母音の音声表記には /ə/ および /ɜ:/ を使うことも可能である。5 母音体系の /a/ には前舌性も後舌性もないから、/a/ 対 /ə/ の区別は開口度の差によるべきである。/o/ (=GA /ɑ/, GB /ɒ/) 対 /ə/ の区別は円唇性の有無による。

[aɪ] と [əʊ] を日本語で二重母音と解釈するか、母音連鎖と解釈するかは今のところ見解が分かれている。[ɔɪ] も含めて発音は困難ではないので、あえて二重母音として学習させる必要はないかもしれない。一方、単母音 /e/ と二重母音 /eɪ/ の区別、単母音 /o/ と二重母音 /oo/ の区別は日本語話者にとって容易ではないため、(6b) の /e:/ は /eɪ/ として、/o:/ は /oo/ として学習させた方がよいだろう。GPE の提言では /o:/ が /ɔ:/ と /əʊ/ (=GA /oo/) の両方を包摂しているが、/ɔ:/ 対 /oo/ の対立が担う機能負担量は軽くない。結論として、本稿で提案する国際英語の母音体系は、それぞれの短母音に対応する長母音が存在する 6 母音体系である。

- (7) a. 短母音 /i, e, a, o, u, ə/
b. 長母音 /i:, eɪ, a:, oo, u:, ə:/

4. 子音音素の学習

英語の子音音素は 24 種類で日本語の 14 に比べると圧倒的に多い上に、子音の連鎖が音節頭にも音節末にも存在するため、子音同士の組み合わせによる意味の区別も多様になる。GPE によると、音素対立が担う機能負担量は母音よりも子音の方が重いため、子音は厳密に区別されなければならない。従って、日本語のように流音を一つしか持たない言語が第一言語であっても、/l/ 対 /ɫ/ の区別は必須となる。英語にあって日本語にない子音音素は以下の 11 種類である。

- (8) /f, v, θ, ð, ʃ, ʒ, ʒ, ʒ, l, ɹ, ŋ/

この中で /ʃ, ʒ, ʒ, ʒ/ に類する子音は日本語でも /i/ の前で異音として使われているので、発音することは難しくない。しかし、英語では異音ではなく独立した音素であるから、意味を区別する機能を担っていることを明示的に教える必要がある。その際 /ʃ/ と発音すべき子音を /s/ と発音したり、/ʒ/ と発音すべき子音を /t/ と発音したりする、いわゆる直し過ぎ (hypercorrection) にも注意する必要がある。他方、現代の日本語では「ジ」と「ヂ」は弁別的ではないため、/ʒ/ と /ʒ/ の区別はほとんど学習不可能と言える。/ʒ/ はフランス語からの借入語とともに英語に入った子音で、英語母語話者でさえ語中以外では /ʒ/ に置き換える傾向がある。⁴⁾

非歯擦音の /θ/ は日本語には存在しないと考えられてきたが、最近の日本語では歯擦音の /s/ を無意識に /θ/ で発音する傾向があり、この点において注意が必要である (牧野 2005: 62)。従来から区別の必要が強調されてきた /s/ と /θ/ は、実は調音位置よりも摩擦の強さによって区別が容易になる。破裂音や鼻音も歯の裏で調音する日本語話者に対して、歯茎音 /s/, /z/ を発音する際には強い摩擦が必要になることを明示的に教えることは有効であろう。

英語の摩擦音は唇歯・歯間・歯茎・後部歯茎・声門という 5 か所の調音位置によって細かく区別されているが、このような言語は稀であり、日本語には

歯摩擦音の /s/, /z/ と声門摩擦音の /h/ しか存在しない。中でも非歯摩擦音の /f/ 対 /θ/ の区別が英語の母語話者にとってさえ容易でないことは、コクニーやエスチュアリといったロンドンの方言において /θ/ が /f/ で置き換えられていることから明らかである。しかしながら、英語において /f/ 対 /θ/ の対立が担う機能負担量は軽視できないため、これらの子音音素が併合する可能性は低い。1980年代からロンドンの若年層に支持されてきたエスチュアリは、いずれ RP に取って代わるのではないかと予測されたこともあるが、RP すなわち GB への信頼が根強いのは、音素対立が維持されていることが一因ではないかと推測される。⁵⁾

流音を一つしか持たない言語を母語とする英語学習者にとって、/l/ 対 /ɹ/ の弁別は不可能に近いと思われがちだが、訓練によっては発音の区別のみならず聞き分けも可能になる。GPE は後部歯茎接近音 [ɹ] 以外の /r/ を許容しているが、歯茎弾音 [ɾ] を使用すると歯茎側面接近音 /l/ との区別がますます困難になる恐れがある。聴き取りの試験で /ɹ/ を /w/ と聞き違える学習者が少なからずいることから、[ɹ] の余剰素性である円唇性を利用する方法が有効と考えられる。英語母語話者でも舌端の調音を伴わずに円唇性のみによってこの子音を発音することがあり、イギリス南東部では唇歯接近音 [v] の使用が流行しつつある。しかしながら、舌端の動きを伴わない [ɹ] は幼い子どもの発音に特徴的な調音方式でもあることから、大人には推奨されない。/ɹ/ の発音を指導する際には舌端を後部歯茎に向かって接近させることを、/l/ との聞き分けには /ɹ/ が円唇性を伴うことを明示的に教えるのが有効であろう。

日本語母語話者にとって弁別が最も困難な子音は、語末の鼻音である。日本語の鼻音が撥音として音節末に出現する場合には環境によって [m], [n], [ŋ], [ɳ] という 4 種類の異音があり、語末では口蓋垂の鼻音 [ɳ] になる。これに対して英語の鼻音は語末でも弁別的な独立した音素であり、*ram, ran, rang* は語末の鼻音 /m/, /n/, /ŋ/ によって意味の区別がされている。日本語のような言語を母語とする学習者がこれらを聞き分けるのは不可能であるが、発音

する際に /m/ は両唇を閉じていること、/n/ は舌端を最後まで歯茎に付けていることが重要である。/ŋ/ は撥音または鼻濁音として使用しているので発音は難しくないが、[ŋ] が後続しないように注意する必要がある。⁶⁾

一方、英語にも日本語にもある子音音素は以下の 13 種類である。学習者に対して明示的に指導する必要はないが、指導者は調音位置や調音様式の違いを認識する必要がある。

(9) /p, b, t, d, k, g, s, z, h, m, n, j, w/

破裂音 /t, d/ ・摩擦音 /s, z/ ・鼻音 /n/ は、英語では歯茎音であるが、日本語では上の前歯の裏で調音されている。歯音は歯茎音に比べて弱くなる傾向があるので、強い破裂や摩擦を実現するためには歯茎で調音する必要がある。すでに述べた通り、英語の /s/ を /θ/ から区別するためには歯茎で強い摩擦を作り出すことが最も重要である。

無声歯茎破裂音 /t/ を歯茎で調音すると、氣息 (aspiration) が発生しやすくなる。英語母語話者は、語頭 (正確には音節頭) の破裂音の無声/有聲の区別を氣息の有無によって判断していると言われる。日本語では、無声/有聲の区別を声帯が振動し始める時間 (Voice Onset Time : VOT) の差で判断しているが、VOT は年齢や方言による差が大きく、母語話者同士でも聞き間違いが生じることがある。英語の音声指導では、強勢音節の音節頭にある無声破裂音は必ず帯気音 [p^h], [t^h], [k^h] になることを利用するとよい。他方、音節末では先行する母音の長さで無声/有聲の区別をしている。音節末の破裂音は閉鎖したまま破裂しないことが多いが、有聲音が連続していれば声帯の振動は持続しているため、有聲閉鎖音の前では母音が長く聞こえる。英語の破裂音の無声/有聲の区別には、このような余剰素性を利用することが有効である。なお、GA には *writer, rider* のような語で語中の /t, d/ が有聲歯茎弾音 [ɾ] になる弾音化 (flapping) という現象があるが、GPE は流音 /ɹ/ との混同を懸念して推奨していない。

声門摩擦音 /h/ は、日本語では後続する母音に

よって3種類の異音がある。*/i/*の前では硬口蓋摩擦音[ç]、*/u/*の前では両唇摩擦音[ɸ]になるため、*hit*や*who*のような語でこれらの異音が無意識のうちに使われることが多い。このような第一言語からの影響は学習者にとっては避けられないものであるが、指導者は意識して声門摩擦音[h]を使用すべきである。特に、*which*, *where*などの疑問詞で両唇摩擦音[ɸ]が避けられない場合には、GBのように[h]音を削除して[wɪʃ], [weə]と発音する方がよい。

硬口蓋接近音/j/は、日本語では外来語も含めて*/i/*の前には現れないため、*year*のような語の発音が困難になる。同様に、軟口蓋接近音/w/は*/u/*の前には現れないため、特に*woman*のような語の発音が困難である。指導者は母音の前に子音が存在することを意識し、狭窄を強くして発音する必要がある。

要約すると、本稿で提案する国際英語の子音音素は以下の23種類である。

- (10) a. /f, v, θ, ð, l, ɹ/
 b. /ʃ, ʒ, dʒ, ŋ/
 c. /p, b, t, d, k, g, s, z, h, m, n, j, w/

(10a)は日本語に存在しない音素として、調音位置や調音様式を明示的に教える必要がある。(10b)は日本語に異音として現れるものであるが、英語では意味を区別する機能を持っているため他の子音と厳密に区別する必要があることを教える。ただし有声後部歯茎摩擦音/ʒ/は、独立した音素として/dʒ/と区別する必要はないであろう。(10c)は日本語にも音素として存在する子音であるから学習者に対して明示的に教える必要はないが、指導者は英語との違いを強く意識することによって効果的な音声指導をすることが必要である。

5. 音声指導の方向性

以上の考察から、本稿では英語の非母語話者に対する音声指導の目標として、以下の母音体系と子音音素の学習を提案する。

- (11) a. /i, e, a, o, u, ə/+ /i:, eɪ, a:, ou, u:, ə:/
 b. /p, b, t, d, k, g, f, v, θ, ð, s, z, ʃ, h, ʒ, dʒ, ɹ, l, m, n, ŋ, j, w/

母音は日本語の5母音に非円唇中舌中母音/ə/を加えた6母音体系で、各母音に対応する長母音の体系が存在する。子音は英語の子音音素から有声後部歯茎摩擦音/ʒ/を除いた23種類である。近年、音声指導に発音記号を導入することが検討されているが、それよりも発音と綴字との対応関係を教える方が効果的である。長母音は通時的な変化を受けているせいで対応関係が複雑であるが、辞書で発音記号を確認するよりも綴字を見ただけで発音できる方が望ましい。

いくつの分節音を区別すれば意味を正確に区別できるのか、ということは外国語を学習する上できわめて重要な情報であるにもかかわらず、英語教育ではこれまで明示的に伝達されてきたとは言えない。分節音に関して明示的に指導すべきことは以下の3点である。

- (12) a. 英語の母音は6種類で、日本語にはない母音が一つ存在すること
 b. 英語の子音は23種類で、日本語にはない子音が複数存在すること
 c. 英語では、子音が二つ以上連続する場合があること

開音節言語を母語とする英語学習者が尾子音や子音連鎖を発音する際、子音削除か母音挿入のいずれかが生じる。入力にある子音を削除するよりは入力にない母音を挿入する方が逸脱度は低いけれども、Jenkins (2007: 174-175)によれば日本語話者の母音挿入に違和感を持つ外国人は少なくない。指導者は英語と日本語の音節構造を意識しながら、音節に言及することなく母音挿入を避けるように学習者を導く必要がある。

最後に、アクセント・リズム・イントネーションといったプロソディーの指導について提案する。GPEは、多音節語のアクセントのパターンを学習させることは、正確な分節音を学習させることと同程

度に重要であると提言している。しかしながら、英語のアクセントはゲルマン語由来の語頭アクセントとロマンス語由来の語末アクセントが混在している上に、後述する通りリズムやイントネーションの影響を受けるため、規則性を教えることは困難である。従って、英語のアクセントは意識的に学習する必要があるが、学習したアクセントを表現する方法を指導することは可能である。日本語のアクセントは声の高さ (pitch) の下降によって知覚されるのに対して、英語のアクセントは強さ・高さ・長さの3要素から成る。このうち強さ (intensity) という要素が強調されると強勢アクセントと呼ばれるが、「高さ」が物理的に測定可能な要素であるのに対して、「強さ」は現時点では測定不可能であり、強勢アクセントを持たない言語を第一言語とする英語学習者には知覚できない。⁷⁾

そこで、もう一つの要素である「長さ」をアクセントの表現に利用することが推奨される。英語の母音は強勢音節では完全母音で相対的に長く発音されるのに対して、無強勢音節では縮小して音質があいまいになることがよく知られている。音素対立を失った縮小母音は慣習的に[ə]で表記されるが、フランス語の母音音素 /ə/ とは異なり、はっきりとした音質はない。GPE は、英語の非母語話者が無強勢母音を[ə]で発音する必要はないと提言している。しかしながら、無強勢母音を完全母音と同様に発音すると、英語に特徴的な強弱のリズムは確実に失われる。強弱の交替リズムを完全に再現することはできなくても、無強勢母音を弱く、短く、あいまいに発音することによって強勢音節を相対的に卓立させることは可能である。多音節語のアクセントを正確に発音するためにも、英語ではアクセントのない(音節の)母音は例外なく弱化することを明示的に教えるのは有効であろう。

英語のアクセント句内では、強勢音節が隣接するのを避けて強弱の交替リズムを実現するために、強勢移動が生じることがよくある。*adult, detail* のように、本来第2音節に強勢のあるロマンス系の語でアクセントの揺れが観察されるのは強勢移動の結果である。移動後のアクセントが完全に語彙化すると、

語アクセントの位置が変化したものとして辞書に記載されることになるので、指導者には注意が必要である。GA に比べて GB では語アクセントの変化が著しく、*adult* の第1音節に強勢を置く話者の割合は、アメリカ英語で12%に対してイギリス英語では84%である (Wells 2008: 12)。⁸⁾

交替リズムの圧力による強勢移動に加えて、英語はイントネーションが語アクセントに優先する言語である。イントネーションの核音調 (nuclear tone) は文中で最も強く発音される音節に現れるため、疑問文では上昇調イントネーションの低声調 (low tone) が最も強く発音される内容語の強勢音節に付くことになる。例えば、*lawyer* という名詞は単独で発音される場合は第1音節に強勢があり、この音節のピッチが高くなるのに対して、*Is she a lawyer?* という疑問文では同じ音節に低声調が付くため語強勢のピッチは抑制される。⁹⁾ 疑問文の上昇調イントネーションは日本語も同じであるが、語アクセントのピッチは保たれたまま、後続する音節に低高の核音調が現れる点で異なる。イントネーションはきわめて複雑な意識下の現象であり、GPE は母語話者と同じイントネーションを学習する必要はないと提言している。しかしながら、英語がイントネーション言語であり、核音調が文中で最も強い強勢音節と結び付くことや、語アクセントが交替リズムとイントネーションの影響を受けるという点で日本語と異なるという事実は、少なくとも指導者は認識する必要がある。

以上の考察から、以下の事実はプロソディーの指導において明示的に教えた方がよいと考えられる。

- (13) a. 英語の母音はアクセントがないと例外なく縮小 (または弱化) すること
- b. 英語のリズムは強弱の繰り返しであること
- c. イントネーションによって文の意味が変わること

Excuse me という発話はイントネーションによって意味が全く異なることからわかる通り、発話の

真意を正確に伝えるためにイントネーションが重要であるということは、明示的に教える必要がある。プロソディーの指導は流暢性を目的とするものではない。イントネーションは話し言葉において文の意味を担い、語強勢はイントネーションの核音調を担うからこそ指導が必要なのである。英語の分節音を第一言語のプロソディーに乗せてしまうと、流暢であればあるほどかえって聴き取りにくくなる。

注

- 1) Cruttenden (2014: 70)によると、古英語から中英語まで /r/ は顫動音または弾音であったと推定される。近代英語初期に語末で摩擦音化または接近音化し、17世紀に入ると母音化し始めて、子音としては18世紀中に消失した。
- 2) 北部方言では *put* と *putt*, *could* と *cud* の区別はないが、*book* の母音は [u:] と発音されることがある。(Cruttenden 2014: 92)
- 3) 中舌中母音 /ɜ:/ は綴字が示す通り [ɪ], [ɛ], [ʌ] の対立が17世紀頃に中和した結果であるため、[aɪ] に由来する長母音 /a:/ との対立が担う機能負担量が重くなるものと考えられる。
- 4) 有声後部歯茎摩擦音 /ʒ/ は、語頭にはほとんど出現しない。語末では *beige*, *rouge* のようなフランス語由来の借入語に保存されているが、英語では破擦音 /dʒ/ に置き換え可能であり、*Asia*, *version* のように語中では無声音 /ʃ/ と交替可能である。(Cruttenden 2014: 205)
- 5) 社会言語学の分野ではエスチュアリはすでに過去の流行となり、GPE 第8版には Jafaican と呼ばれる新しい方言についての記述が見られる。ジャマイカ系移民が使用する発音の影響を受けた fake Jamaican の略称であるが、正式には Multilingual London English と称され、西インド諸島だけでなくアジア・西アフリカ・東欧出身の移民の発音が混在する。/θ, ð/ を /f, v/ で置き換える点はコクニーやエスチュアリと同様だが、従来のロンドン方言に特徴的な二重母音の推移は観察されず、/eɪ/, /əʊ/ が /e:/, /o:/ に単音化する傾向がある。(Cruttenden 2014: 91)
- 6) 中尾 (1985: 408) によると、語末の -ng の [ŋ] は17世紀中に消失した。以後、*singer* [sɪŋə] のように派生接辞が付加されて語中に入っても [ŋ] は発音されない。
- 7) 強さは物理的な音の大きさ (loudness) とは異なる。物理的に測定不可能な日本語の「モーラ」が発話の長さを測る単位として心理的に実在するように、英語の強勢も母語話者には心理的に実在するリズムの単位ではないかと推測される。
- 8) ただし、*detail* の第1音節に強勢を置くアメリカ英語話者は75%である。(Wells 2008: 226)
- 9) この現象は疑問文に限らない。例えば *however* の第2音節に低声調が付き、辞書に記載された発音とは聴覚印象が異なることがある。このようなイントネーションは、発話に何らかの留保 (reservation) が存在することを示唆することが多い。

引用文献

- Collins, Beverley and Inger M. Mees (2009) *Practical Phonetics and Phonology: A Resource Book for Students*, 2nd ed. Oxford: Routledge.
- Cruttenden, Alan (2008) *Gimson's Pronunciation of English*, 7th ed. London: Hodder Education.
- Cruttenden, Alan (2014) *Gimson's Pronunciation of English*, 8th ed. Oxford: Routledge.
- Jenkins, Jennifer (2007) *English as a Lingua Franca: Attitude and Identity*. Oxford: Oxford University Press.
- 牧野武彦 (2005) 『日本人のための英語音声学レッスン』東京: 大修館.
- 中尾俊夫 (1985) 『音韻史』(英語学体系 11) 東京: 大修館.
- Wells, J. C. (2008) *Longman Pronunciation Dictionary*, 3rd ed. Essex: Pearson Education.